

令和 8 年 2 月 13 日

株式会社博報堂

澤田 康介

委嘱業務完了および実績報告書

資源エネルギー庁「令和 7 年度エネルギー需給構造高度化対策調査等事業（エネルギー教育推進事業）地域におけるエネルギー教育実践事業」における令和 7 年 6 月に委嘱された内容について、委嘱業務の完了と実績を以下の通りご報告いたします。

・委嘱概要

特別委員氏名	澤田 康介
委嘱期間	令和 7 年 6 月～令和 8 年 3 月 31 日
実践タイトル	石炭火力は時代遅れ？それとも地域資源の再評価？—探究型授業によるエネルギー政策立案

・実施事項

<p>①第一時 日本のエネルギー供給の現状と課題を知る</p> <ul style="list-style-type: none">・「何の数字？」（約 11%：日本のエネルギー自給率、約 18%：日本の発電量に占める再生可能エネルギー、約 11 億：日本の二酸化炭素年間排出量・世界 5 位） →動画で確認「エネルギーにまつわる問題に挑戦！クイズ！何の数字 de SHOW⑤ 社会科編」・問い「日本はエネルギー供給をどうすべきか？」・火力・原子力・水力・再生可能エネルギーの中で、よい発電方法を 3 つ選ぶ・ソーラーパネル問題の映像を視聴し、太陽光発電への違和感を引き出し、次時へつなげる
<p>②第二時 再生可能エネルギーの割合が増えた理由を考える</p> <ul style="list-style-type: none">・問い「なぜ太陽光発電の割合が増えているのか？」・資料をもとにして、化石燃料や公害や東日本大震災などの過去の教訓との関わりから再生可能エネルギーの割合が増えている理由を考える・カーボンニュートラルが世界的に注目されていることを伝える →釧路での石炭の自給による火力発電を紹介し、次時へつなげる
<p>③第三時 釧路の火力発電の現状を知り、これからのエネルギー供給のあり方を構想</p> <ul style="list-style-type: none">・釧路で石炭を使って火力発電を行うことの是非を問う・「エネルギーの地産地消」の意味を考える →映像（地元産石炭使う「釧路火力発電所」営業運転へ…地産地消 坑内掘り炭鉱の

経営安定も期待)

- ・インタビュー資料③「釧路火力発電所の方」
- ・火力・原子力・水力・風力・地熱・太陽光の中で、よい発電方法ベスト3を再考
- ・経済産業省の方のエネルギー供給のインタビューを共有

・成果

(1) エネルギー問題を「多面的・複合的」に捉える力の育成

多くの生徒が、「どの発電方法にもメリット・デメリットがある」「環境にやさしい＝無条件によい、ではない」と記述しており、単純な善悪二元論から離れ、比較・検討する視点を身に付けていることがわかった。特に、太陽光・風力・火力などを具体例に挙げ、生態系・景観・発電量・CO₂排出といった複数の観点を関連付けて考えている点は、本実践の大きな成果である。

(2) 社会的事象を「自分ごと」として考える姿勢の形成

「日本のエネルギー自給率」「自分たちの生活と電気の関係」「将来の地球環境」など、国・社会の課題を自分の生活や将来と結び付けて捉える記述が多く見られた。釧路のメガソーラーや日本の火力依存といった具体的事例を扱ったことで、地域・日本・世界をつなぐ学びが実現したと考えられる。

・今後への課題

(1) 「難しい」で終わってしまう生徒への支援

多くの生徒が「エネルギー問題は難しい」「正解がない」と感じており、具体的な意思決定や自分なりの判断まで踏み切れていない記述も見受けられる。今後は、条件を限定した意思決定活動（もし〇〇市の担当者ならどうするか）、選択肢を比較したうえで理由を述べる活動などを取り入れることで、「難しい」から「考えて決める」段階へ導く工夫が求められる。

(2) 解決策が抽象的にとどまる点

「バランスが大切」「少しずつ移行するべき」といった表現は多いものの、どのように・誰が・どの程度という具体性には個人差があった。数値資料やシミュレーション、立場別（国・企業・市民）の役割整理を行うことで、より現実的・社会的な理解につなげる余地がある。